

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370491

研究課題名(和文)バスク語諸方言の文法記述(「親世代」と「子世代」のことばの違いをめぐって)

研究課題名(英文)A descriptive study on the grammar of some dialects of modern Basque (focused on differences between elder and younger generations)

研究代表者

吉田 浩美(Yoshida, Hiromi)

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：70323558

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文): スペイン領バスク自治州で話されるバスク語アスベイティア方言、アスコイティア方言、サラウツ方言、セストア方言、スマイア方言について、各々の親世代(50歳代以上)と子世代(20歳代)の音韻と文法の調査を行なった。現段階で見えたことは、地域的にはアスベイティア方言とアスコイティア方言は標準バスク語から最も離れており、他の3つは標準語と共通点が多い。各方言で世代間でいくつかの単音に違いが多かれ少なかれ見られること、特定の構造について相違が顕著であること、子世代では文法面での例外的な現象が少なくなっていることが目を引いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代バスク語は、そもそも地域変種が多いことで知られるが、2言語併用社会に見られるファクター、標準語の普及などにより変容を続けている。その変容の様子を、地域ごとの違いという観点からだけでなく、「世代ごとの違い」と言う視点も加え、音韻と文法について「地域差」と「世代差」の2方向から調べて記述し、その変容の要因を探ることは、現代バスク語の全体像に迫るための研究の一部として、記述言語学としても社会言語学的に意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文): I did research in phonetics and grammar of the 5 dialects of modern Basque, spoken in Azkoitia, Azpeitia, Zarautz, Zestoa and Zumaia in Gipuzkoa province of the Basque Autonomous Community, Spain. In each dialect, I got the data of two native speakers of two generations; the elder ones are over 50 year old and the younger ones are between 22 and 25 years old. The dialects in Azpeitia and Azkoitia are quite different from the standard Basque, and other three dialects have many characteristics in common with the standard Basque. As for phonetical phenomena, there is a few differences between the elder generation and the younger one in every dialect. As for grammatical phenomena, in some special structures there are some remarkable differences between the two generations in every dialect.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 バスク語 音韻 文法 地域方言 社会方言

1. 研究開始当初の背景

バスク語は狭い領域で100万に満たない話者を持つ言語であるにもかかわらず、地域の変種(地域方言)の豊富な言語である。バスク語の話者数は1980年代には50万ほどと言われていたが、現在ではおよそ80万とされる。わずか40年ほどの間にここまで話者が増えたのは、バスク語で行われる初等～中等教育の成果の現れと見られ、したがって増加した話者はおもに若年層である。このようにバスク語をとりまく社会的環境が大きく変化するなか、地域方言ごとの特徴はもとより、年配の世代と若い世代との間の「ことばの世代差」がより顕著に観察される。若い話者が増えたことから、若者に特有の言い回しや語彙が以前より目立つようになり、また、語形変化する語の形態論上の相違、音声上の相違など、世代による違いは多岐に渡るようである。しかも、このような差異は、都市部か農村・漁村部か、よそからの移民が多いところか、古くからバスク語がよく保存されているところか、などの社会的要因によって集落から集落へと異なるものであると考えられ、興味深いテーマであると思う。一方で、バスク語にとっての威信言語であるスペイン語(フランス領ではフランス語)の影響は歴史を通じて常にある。

言語のあらゆる側面において世代間に違いが生ずるのはどの言語にも見られることであるが、一方で、その「違いの質」に関しては言語ごとに要因は様々であろう。今回、筆者は調査にあたり次の二つの母語話者グループを考慮することとした：

一つは「幼少時よりバスク語による教育を受けてきたA世代(=おおむね50歳代前半より若い世代)の話者」と「バスク語による教育を受ける機会がなく、スペイン語で教育を受けてきたB世代(=おおむね50歳代後半以上の世代)の話者」である。この二つの世代の特徴は、おおまかに次のように要約できる：

A世代	日常生活では各自の方言を使いながら学校ではおもに共通バスク語を使用している。1日のうちの長い時間を過ごす学校で共通バスク語を使って暮らせば、当然その影響が普段の話し言葉である各自の方言に及ぶと予想される。さらに、1983年に始まった共通バスク語によるテレビ放送を皮切りに、現在ではあらゆるメディアで共通バスク語による様々なコンテンツが右肩上がりに増加している。すなわち、A世代のバスク語話者は、年齢が若いほど、教育の場のみならず生活のあらゆる局面で共通バスク語に親しんでいる世代である。
B世代	教育をスペイン語で受けたため、この世代の大半の人は共通バスク語を習得していない。そのため読み書きに関してはスペイン語の方が楽であるという世代である。共通バスク語の影響はA世代に比べるとはるかに少ない。

現代バスク語の、複数の方言の音韻と文法について、地域間の相違だけではなく「世代間差」という側面からも調査・研究を行うことにより現代バスク語の全体像に迫るための研究の一部として貢献できると考えた。

2. 研究の目的

スペイン領バスク自治州の中の、互いに近い距離にある5つの自治体で話されているバスク語の変種(方言)について、おもに音韻と文法の面で地域間の相違、および、それぞれの親世代(50歳代以上)と子世代(20歳代)という二つの世代の間の違を明らかにすること。

3. 研究の方法

スペイン領バスク自治州ギプスコア県の中の、互いに近い距離にある5つの自治体であるアスペイティア、アスコイティア、セストア、スマイア、サラウツで話されているバスク語の変種(方言)について、それぞれ親世代(50歳代以上)と子世代(20歳代)の話者と面接質問調査によってデータを収集し、分析を行う。互いに近い距離にある自治体を選んだのは、バスク語はそもそも方言差が大きいことが知られており、互いに離れた複数の場所の変種が異なることは自明であったので、近いところでどれほどの相違があるかを見るためである。

- ・音韻については、単音の確認のほか、名詞のアクセントを調査する。
- ・文法については、助動詞の活用形、500あまりの動詞の使用法、ある一定の条件のもとで与格でもって所有者を表す構造、「AのBはCである」を表す構造、天候・気象に関わる表現を表す構造、例外的な振る舞いをする動詞を含む構造に絞って調査する。

4. 研究成果

(1) バスク語アスペイティア方言

この方言のデータが最も豊富に収集できている。

(i)音韻：他の多くの方言や共通バスク語で区別されている舌端の無声歯茎摩擦音(共通バスク語の正書法ではz)と舌尖の無声歯茎摩擦音(同じくs)は、この方言では音韻論的には区別されないが、共通バスク語の教育を受けている子世代では、共通バスク語とたまたま同じ語形で

ある語（形態素）についてはそのスペリングがわかっているのに、自身の方言の場合でも区別しようと努める傾向が認められる（複数の話者で確認.）。また、今回の調査対象の世代ではないが、有声硬口蓋側面音と有声硬口蓋接近音の区別が10代以下の話者では薄れてきていることが観察される。20歳代の話者はこの区別をまだ保っているようだ。名詞のアクセントについては、世代間の差は今のところ大きいとは言えない。多くの名詞で単複をアクセントで区別するが（形態が異なる場合もあるが）、その区別は両世代とも保っている。

(ii) 文法

- (a) 助動詞の語形のうち、親世代では **-ko** に終わるものと **-be** に終わるものが、子世代では共通バスク語と同じ語形に変わってきているのが目をひく。この **-ko**、**-be** の語尾はスペイン領バスク自治州ギプスコア県内のバスク語変種の中でも、アスペイティア方言とアスコイティア方言に特徴的なものである。
- (b) 500あまりの動詞の調査では、親世代では使うが子世代は使わない（あるいはその逆）ものがいくつか見られる。調査者の予測に反したのは、子世代では共通バスク語の影響から親世代よりもスペイン語からの借用語が少ないのではないかと考えていたが、そういうわけではなかったことである。例えば、「書く」は親世代はスペイン語 *escribir* からの借用である *eskribitu* を用いるのに対し、子世代は共通バスク語で採用されている固有語とされる *idatzi* を用いる傾向が強い。しかし、「(時間などが) 続く、(食べ物などが) もつ」は、親世代は固有語の *iraun* を用いるが、子世代はスペイン語 *durar* を借用した *durau* を用いる傾向が強い。「書く」のような、教育の場でよく使われるに違いない語に関して子世代は共通バスク語で採用されている語を用いているので、ならば「読む」はどうかというと、これは両世代ともスペイン語 *leer* を借用した *letu* を使っている。
- (c) 所有者を一定の条件下で与格で表す構文については、子世代では親世代に比べ、所有者を所有属格で表す構文を用いる傾向が大きい。
- (d) 「AのBはCである」を表す場合、「A=所有属格、B=C=絶対格で表しそれに呼応する動詞を用いる構造」（以下「所有格型」と略称）のほか、ある条件のもとで「A=能格、B=C=絶対格で表しそれに呼応する動詞を使う構造」（以下「能格型」と略称）がある。親世代はこの二つの構造を区別しているが、子世代ではどんな条件のもとでも前者の構造へシフトしている。子世代は能格型を「年配者が使うイメージ」であるとコメントしている。
- (e) 天候・気象を表すための構造は、文中に現れる項の格と、共起する助動詞の種類が定石どおりでない（すなわち例外的）のが特徴だが、この場合も、若い世代では「雨が降っている・降った・降るだろう」などの使用頻度の非常に高いものを除いては、例外的でない方向へシフトしつつある。
- (f) 例外的な振る舞いをする動詞とは、文中に現れる項の格と、共起する助動詞の種類が定石どおりでない（すなわち例外的）ものであるが、(e)との違いは意味的にカテゴリ化ができないものである、という点である。このような動詞はこの方言の親世代では99認められるが、この場合も、子世代ではそのような動詞は減っており、定石通りの使い方の方向へ向かっているようだ。

(2) バスク語サラウツ方言

- (i) 音韻：この方言でも舌端の無声歯茎摩擦音と舌尖の無声歯茎摩擦音は音韻論的には区別されないが、子世代ではアスペイティア方言の子世代と同様、区別しようと努める傾向がある。この方言では名詞の単複をアクセントで区別することはなく、それは両世代とも同じであった。
- (ii) 文法：
 - (a) 助動詞の語形は世代間に顕著な差は見られない。
 - (b) 500あまりの動詞の調査でも世代間で大きな差は見られなかった。
 - (c) 所有者を与格で表す構文については、子世代では親世代に比べ、所有者を所有属格で表す構文を用いる傾向があると言える。が、親世代でもこの傾向はアスペイティア方言より大きい。
 - (d) 「AのBはCである」を表す構文では、親世代は、ある条件のもとで能格型を用いることが期待されたが、親世代・子世代ともに同じ条件のもとでも所有格型を使う傾向が強いことがわかった。
 - (e) 天候・気象を表す構文については、親世代、子世代ともに「雨が降っている・降った・降るだろう」などの使用頻度の非常に高いものを除いては、例外的でない使い方をしている傾向が見られる。
 - (f) 例外的な振る舞いをする動詞については、アスペイティア方言の親世代で99あるものが、この方言では親世代においても少なくなっており、子世代との差も少ない。

(3) バスク語セストア方言

(i) 音韻：この方言でも舌端の無声歯茎摩擦音と舌尖の無声歯茎摩擦音は音韻論的には区別されず、今回の調査協力者に関しては少なくとも、共通バスク語の教育を受けている子世代であっても区別を意識していないようである。また、この方言でも名詞の単複をアクセントで区別することはなく、それは両世代とも同じである。

(ii) 文法：

- (a) 助動詞の語形は世代間で顕著な差は見られない。
- (b) 500 あまりの動詞の用法の調査でも世代間で大きな差は見られない。
- (c) 所有者を与格で表す構文については、子世代では親世代に比べ、所有者を所有属格で表す構文を用いる傾向があると言える。が、親世代でもこの傾向はアスペイティア方言よりは大きい。
- (d) 「A の B は C である」については、親世代は、ある条件のもとで能格型の構造を用いることが期待されたが、親世代・子世代ともに同じ条件のもとでも所有格型を使う傾向が強い。ただし、親世代は能格型を「年配者が使うもの」と感じることはないとのこと。
- (e) 天候・気象を表す構文については、サラウツ方言同様、親世代、子世代ともに使用頻度の非常に高いものを除いては、例外的でない使い方をする傾向が強いと言える。
- (f) 例外的な振る舞いをする動詞については、これもサラウツ方言同様、アスペイティア方言の親世代で 99 あるものが、この方言では親世代においても少なくなっており、子世代との差も少ない。

(4) バスク語スマイア方言

この方言については、親世代のデータが不足しているのが現状である。2019 年からの新たなプロジェクトにおいて調査を継続中である。

(i) 音韻：この方言でも舌端の無声歯茎摩擦音と舌尖の無声歯茎摩擦音は音韻論的には区別されず、子世代であっても区別しない。また、少なくとも子世代では有声硬口蓋側面音と有声硬口蓋接近音の区別がない。この方言では名詞の単複をアクセントで区別することはなく、それは両世代とも同じである。

(ii) 文法：

- (a) 助動詞の語形は世代間に顕著な差は見られない。
- (b) 500 あまりの動詞の用法の調査でも世代間で大きな差は見られない。
- (c) 所有者を与格で表す構文については、少なくとも子世代では所有者を所有属格で表す構文を用いる傾向がある。
- (d) 「A の B は C である」を表す構造については、少なくとも子世代は所有格型を使う傾向が強い。
- (e) 天候・気象を表す構文については、他の方言同様、少なくとも子世代は使用頻度の非常に高いものを除いては、例外的でない使い方をする傾向が強い。
- (f) 例外的な振る舞いをする動詞については、これもサラウツ方言同様、アスペイティア方言の親世代で 99 あるものが、この方言では少なくとも子世代では少なくなっている。

(5) バスク語アスコイティア方言

この方言についても親世代のデータが不足しているのが現状である。2019 年からの新たなプロジェクトにおいて調査を継続中である。

(i) 音韻：この方言でも舌端の無声歯茎摩擦音と舌尖の無声歯茎摩擦音は音韻論的には区別されないが、今回の子世代の調査協力者は区別を非常に意識しており、区別するよう努めようとしている。また、少なくとも子世代では有声硬口蓋側面音と有声硬口蓋接近音の区別がなくなっている。この方言では親世代は名詞の単複をアクセントで区別するが、子世代も同様である。また、この方言では、/i/ に終わる形態素に付く語尾は /x/ (= [χ]) で始まる特徴があるが、この特徴は子世代も保っている。

(ii) 文法：

- (a) アスペイティア方言の場合と同様に、助動詞の語形のうち、親世代では -ko に終わるものと -be に終わるものが、子世代では共通バスク語と同じ語形に変わってきているのが目をひく。
- (b) 500 あまりの動詞の用法については、アスペイティア方言とほぼ同様のことが観察される。
- (c) 所有者を与格で表す構文については、少なくとも子世代では所有者を所有属格で表す構文を用いる傾向があるものの、ある条件のもとでは与格も用いる。
- (d) 「A の B は C である」の構造については、ある条件のもとで A=能格、B=C=絶対格で表し、それらに呼応する動詞を使う構文と A=所有属格、B=C=絶対格で表し、それら

に呼応する動詞を使う構文があるが、この方言においても少なくとも子世代は後者を使う傾向が強い。

- (e)天候・気象を表す構造については、他の方言同様、少なくとも子世代は使用頻度の非常に高いものを除いては、例外的でない使い方をする傾向が見られる。
- (f)例外的な振る舞いをする動詞については、アスペイティア方言の親世代で99あるものが、この方言では少なくとも子世代ではやや少なくなっている。が、アスペイティア方言以外の3つの方言よりは多い。

- ・ 地域的な違いでまず指摘できるのは、全体として言えることは、形態論的に共通バスク語から最も離れているのはアスペイティア方言とアスコイティア方言であり、他の三つはより共通バスク語に近い、ということである。そのため、アスペイティア方言とアスコイティア方言の話者が共通バスク語の影響を受ければ、それだけ目立つことになるので、他方言と比べてその影響が大きく見えるのは当然である。
- ・ 世代間の相違で最も目立ったのは、格と動詞・助動詞の呼応が定石どおりでない構造については、いずれの方言においても親世代では子世代よりも多かれ少なかれ保たれており、子世代では「定石どおり」の方向へ、すなわち例外が少なくなる方向へシフトしていることである。
- ・ スペイン語の影響については借用語が多いことを除けば、今回の調査ではこれと言う顕著な例を示すに至っておらず、調査項目を工夫して現在進行中の新しいプロジェクトで明らかにしていきたい。ただし、「AのBはCである」のAを能格ではなく所有属格で表す方向への傾きなどは、スペイン語の影響によるものである可能性が考えられる。が、強固なエビデンスが欲しいところである。
- ・ 談話の観察や、自由に何かを話してもらったテキストを見ると、親世代ほどスペイン語によるフレーズ（個々の語でなく、文単位の発話、ことわざ、慣用句など）をさし挟む傾向が強い。ただし、バスク語固有の慣用句や言い回しをよく知っていて使いこなすのも親世代である。子世代の方が、総じて共通バスク語の知識に基づく規範意識が高いと言え、舌端の無声歯茎摩擦音と舌尖の無声歯茎摩擦音を区別しようと努める姿勢、助動詞の活用形を共通バスク語に似た形で言うようになっている点などはその表れかもしれない。ただし、規範意識があらゆる局面に表れるわけではなく、有声硬口蓋側面音と有声硬口蓋接近音の区別が失われつつあるように見えるのは、規範に逆行する現象である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 1
2. 論文標題 バスク語（アスベティア方言，サラウツ方言）の名詞のアクセントについて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究』	6. 最初と最後の頁 160-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 20
2. 論文標題 「バスク語アスベティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別 アクセントの観点から」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 CSEL ユーラシア諸言語の多様性と動態	6. 最初と最後の頁 487-501
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 21
2. 論文標題 スペイン領バスク自治州の4自治体における高校生のバスク語の使用状況 社会的側面と文法的側面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CSEL ユーラシア諸言語の動態III 言語の多様性と類型と混成言語	6. 最初と最後の頁 177 - 213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最新のフィールドワークから ～バスク語の普及：その「量」と「質」
3. 学会等名 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語サラウツ方言の名詞のアクセント ~世代間の相違?~
3. 学会等名 科研(No.16K02635)平成29年度研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最近のフィールドノートから - スペイン領バスク自治州のバスク語に関する報告 - バスク語サラウツ方言の名詞名詞・複合語・派生語のアクセント(中間報告)
3. 学会等名 16科研等合同研究会)2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田 浩美
2. 発表標題 バスク語アスペイティア方言の「後置詞に見える形態素」と「後置詞」の区別
3. 学会等名 日本言語学会 第152回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 吉田 浩美
2. 発表標題 「バスク語アスペイティア方言の名詞のアクセント」
3. 学会等名 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最近のフィールドノートから スペイン領バスク自治州のバスク語 バスク語アスペイティア方言, バスク語サラウツ方言の場合
3. 学会等名 ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語の後置詞と格語尾の問題：共通バスク語とバスク語アスペイティア方言の場合（予備的考察）
3. 学会等名 SELE
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語の後置詞と格語尾についての予備的考察
3. 学会等名 2014 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 小林多喜二 （バスク語への翻訳：吉田浩美）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Katakarak (Pamplona, Spain)	5. 総ページ数 275
3. 書名 "Nagusia kanpoan bizi da / 1928ko martxoaren 15a" (現代：『不在地主』 『一九二八年三月十五日』)	

1. 著者名 中原中也 (バスク語訳: 吉田浩美)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Susa (Zarautz, Spain)	5. 総ページ数 62
3. 書名 Chuya Nakahara(中原中也の詩のアンソロジーのバスク語訳)	

1. 著者名 吉田 浩美	4. 発行年 2016年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 156
3. 書名 ニューエクスプレス バスク語	

1. 著者名 ベルナト・エチェパレ (萩尾生, 吉田浩美 訳編)	4. 発行年 2014年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 240
3. 書名 バスク初文集	

1. 著者名 吉田浩美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 168
3. 書名 ニューエクスプレス プラス バスク語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考